

UIFA JAPON NEWSLETTER



No. 93 Jan. 25, 2013

■主な内容

- 「第 56 回海外交流会の会」参加記
・エクセルギーハウスを体験して
- ・大国のはざままでタフに生きる国・モンゴル
- ・林昌二・雅子邸見学に寄せて
- ・岩泉の「だれでもフォトグラファ」の写真展を VI で!
- ・いつも感心する UIFA の復興支援



はじめての収穫 (2 ページ参照)

(写真: 梶島)



(出典: ウィキペディア: モンゴル国)



(写真: 梶島)

「第 56 回海外交流会の会」参加記「エクセルギーハウスを体験して」 Experience the Innovation of Exergy House

建築創作所 遠藤 現
ENDO Gen, architect

2012 年 9 月 8 日に行われた UIFA JAPON 第 56 回 海外交流会「人の住まいと環境技術」に参加した。

宿谷昌則氏の講演に先立って小金井市が運営する環境配慮住宅型研修施設を見学する機会をいただいた。

この施設は「エクセルギーハウス」と呼ばれ、我々の身近に存在するエクセルギーを活用するための工夫が凝らされている。

エクセルギーを活用する家

エクセルギーとは耳慣れない言葉だが、造語ではなく歴とした物理学用語であり、有効エネルギーとも呼ばれる。

我々が日常使う「省エネルギー」という言葉は厳密に言えば正確ではなく、エネルギー保存の法則により、エネルギーはその形態を変えているだけで、自然界に存在する総量は常に一定であり、消費されてなくなっているわけではない。

しかしエネルギーの大部分は、その形を変える際に回収されずに、自然界に拡散してしまっている。その今まで取りこぼされていたエネルギーの部分、つまりエクセルギーを拾い集めて有効に利用しようというのが、このエクセルギーハウスの考え方である。

今回見学したエクセルギーハウス別名「雨デモ風デモハウス」は、太陽熱で暖めた雨水を床下の放熱タンクに貯めたり、小屋裏通風によって冷やされた天井からの冷放射や、キッチン排水を植物や微生物によって分解するなど、エクセルギーを活用するための様々な試みがなされていて、非常に興味深く拝見させていただいた。

「有機的建築」の思想

周囲の厳しい自然環境に対して防備を固め対抗することで、いわば自然を征服しようとするのが西欧型の建築の考え方である。

これに比して、環境に対して開かれていて、自然を受け入れて共存しようとする日本の建築文化には、もともと周囲の自然界に存在する様々な要素を、巧みに建物の一部として取り入れようとする「有機的建築」の思想があった。

その日本から今回のような、エクセルギーを活用する建築というかたちが現れてくることは、きわめて当然のことであるように感じる。



水性植物で排水の浄化も (写真: 正宗) 庭にもエクセルギーの考え方を取り込んで (写真: 須川)

エネルギーを無駄にせず上手に利用しようという姿勢は、今日では社会の主流となっているが、今後このようなシステムが、あたりまえの設備として建築の中に取り込まれていった時にこそ、デザインを伴った建築空間の一要素として、その真価が見極められるであろう。

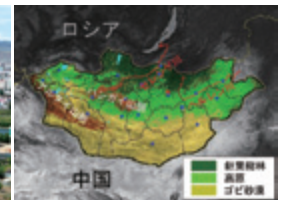
第 17 回 UIFA モンゴル大会

2013 年 9 月 1 日～7 日ウランバートルで開催

大会テーマ: 「地球温暖化に対して戦う女性建築家」
"Women Architects in the fight against global warming"
申込は各自で行います。ふるってご参加ください。



(出典: ウィキペディア: ウランバートル)



(出典: ウィキペディア: モンゴル国)

モンゴル略史

チンギス・ハーンの名前とともに私たちが良く知るモンゴル帝国は、遊牧社会を背景に、13 世紀ごろ、中央アジアにさっそうと登場した。この帝国は人類史上、最も広大な面積を統治したといわれるが、17 世紀には滅びてしまい、19 世紀、清国に実行支配されるに至る。1912 年に清朝が倒れたのち、モンゴル国として一応の独立を果たすものの、南東部は中国に割譲され、これが現在まで続く内モンゴル自治区となる。北部は 1924 年のモンゴル人民共和国の設立まで、中国の宗主権下に置かれる。

人民共和国の設立には、当時ロシア内戦を戦っていた赤軍の強力な支援があったとされる。この設立経緯はソビエトの影響力を著しく強め、モンゴルは資源・原料供給国として位置づけられて、十分な経済発展の機会を失った。また、縦書き文字だったモンゴル語をキリル文字へと変更させるなど、文化面でのソ連化も進められた。首都ウランバートルの建設が行われたのもこの時代である。

1991 年のソ連邦崩壊を受けて、モンゴルはいち早く社会主義を放棄、市場経済化へとむかった。この体制転換に伴う社会・経済上の混乱は深刻で、「パン一本を買うために、寒空の下、一日中並んだ」「燃料が手に入らず、子供の文具や衣類まで、燃やせるものは何でも燃やした」という。

それまで居住地選択が認められなかった人々が、都市に行けば食えるとの期待を込めて、ウランバートルに流れ込んだ。1989 年には 56 万人であったウランバートル市人口が、2012 年には 120 万人へと膨れ上がる。この流入人口を吸収してきたのがゲル地区¹と呼ばれる不良住宅地区である。市街地の周縁に広がり、今では市人口の半数が住み、市街地面積の約 4 割を占めるほどになっている。

ゲル地区の成立に深くかかわるのが、2002 年に実行された国有地の無償払下げ政策である。希望する世帯に最大 700m² の土地を与えるもので、国への帰属意識を高めるため、社会に蔓延する不満を和らげるため、などと政策意図が語られているが、インフラ整備が行われていない草原を木柵（ハザー）で囲い込み、土地の所有権を主張している風景は、いささか異様である。

帝国時代の風景：草原

18 世紀までのモンゴルの歴史を象徴する風景が草原である。都市化によって減少したとはいえ、今でも約 40 万人の遊牧民がいるとされ、牛、馬、羊、ヤギ、ラクダ、ヤクなど、全人口の 10 倍を超える数の家畜が自然放牧されている。草原に立つと私などは、巨大野生サファリパークに来たような楽しさを感じるが、モンゴル人にとって家畜は貴重な財産であり、親しみ深い家族の一員である。遊牧民のまちや住まいは質素で、厳しい自然風土に洗われ、歴史的遺物はほとんど残ってはいない。それでも残されている貴重な風景、それが草原の風景であろう。

ソビエト式都市計画と建物

草原の中に忽然と姿を現すのが、首都ウランバートルである。中心部はソ連型の都市計画が施され、広場を都市核として、ここから東西に伸びる幹線道路に沿って市

街地が形成されているのだが、道路不足による慢性的な交通渋滞に悩まされている。居住地区は機能的なソ連型集合住宅が今なお健在で、天井は高く、一室当たりの面積も広く、ダストシュートが備えつけられているなど、社会主義の居住に対する意識の高さがうかがえる。加えて中心部には、同時代に建設されたパステルカラーのロシア古典様式の建物が散在しており、街並みに西欧の香りと彩りを与えている。

急激な都市発展のツケ

市場経済化以降、2 倍以上に膨れ上がった都市人口の受け皿となったのが、ゲル地区である。上下水道も都市ガスもなく、道路線さえ確定されていないが、「現状道路」の上には電線がかろうじて引かれている。居住者は地区内に数か所設置された個人所有の井戸に行き、水を買って生活の用をたしている。木柵で囲われた敷地には、外部トイレ（穴を掘っただけのトイレ）とゲル、あるいは木造家屋を建てて暮らしている。長くて寒い冬の期間、暖房はもっぱらストーブに頼っており、冬の始まりのころは薪を燃やせても、二月・三月になると燃料代が底をつき、古タイヤやプラスチックゴミを燃やして暖を取ろうとするために、ゲル地区全体が臭い匂いに包まれる日が続く。ゴミの収集も週に一度程度、し尿は垂れ流しで、燃焼に伴う大気汚染も頻出する。幾多の環境問題を抱えるゲル地区である。

ゲル地区の生活改善プロジェクト

ゲル地区で、埼玉大学プロジェクトチームが 2008 年から手がけているのが「野菜栽培によるゲル地区住民の生活改善プロジェクト」²である。生活困窮者の多い東部の地区をフィールドに、『敷地内余地を利用して野菜を育てる』『つくった野菜をおいしく食べる』『栽培した野菜を売って、少しでも家計の助けにする』活動である。

「肉が主食」と言ってもはばからないモンゴル人も、今では野菜食への関心は高い。しかし野菜は肉に比べて高価なために、ゲル地区に住む人の口にはなかなか入らない。できることなら野菜を食べたいと願い、野菜を作る土地は敷地内にも確保できる。だが、これまでせいぜいジャガイモと人参ぐらいしか栽培したことのないモンゴル人には、野菜の作り方がわからない、食べ方も知らない、という現状に対して、野菜栽培の方法を巡回指導し、調理講習会を年 6 回開催して食べ方を教え、今年は一部世帯で、栽培した野菜を売って 1.5 万円程度の収入を得るまでに至った。「種をまいて、芽が出てきたときなどは、ワクワクする」「野菜が育ってくると、庭が緑に覆われて気持ちが良い」「学校から帰ってきた子供と一緒に手入れするのが嬉しい」など、野菜栽培のリクリエーション効果や環境効果をも認めてくれる世帯も出てきて、今後がますます楽しみである。

*1 ゲルとは遊牧民が使用する移動式住居。地方から流入した人は当座はゲルに暮らし、お金がたまったら木造あるいはブロック造の住宅を建設することから、流入者の多い地区をゲル地区と称する

*2 ウランバートル市バヤンズルフ区、モンゴル国立農業大学、国立科学技術大学と共同で行っている Jica 草の根技術協力プロジェクト 2011.6 - 2014.5. なお、この活動には、毎年種を提供してくれる(株)キタ種苗、調理講習のために味噌を提供してくれる(株)ヤマ味噌、現地で野菜を購入してくれる日本料理店・石庭、スーパーマーケットチェーン、Every Day、ベーカリー・ファースト・フード等、多様な企業・団体の協力の下に成り立っている。ここに記して謝意を表したい。

2001年に林雅子氏、そして2011年に林昌二氏が逝去され、夫婦共同設計のご自邸は主を失ってその存続が危ぶまれている。戦後日本の住宅作品として重要なこの自邸の空間を体験し、保存活用の道を見出すために、UIFA Japon 広報部会は9月22日に見学会を開催した。20余名の参加者は、林昌二氏の弟の久保田永三氏、林雅子資料を保存管理する元所員の白井克典氏、調査研究を行っている東京工業大学大学院生2名に迎えていただいて、生前のご夫妻の生活がしのばれる空間を満喫した。見学会の提案者であり、当初からこの自邸をよく知る小川信子名誉会長にお話を伺った。(田中厚子)

林 昌二・雅子邸見学に寄せて
Memory of Shoji & Masako Hayashi and their House

小川 信子
 OGAWA Nobuko

1955年、日本女子大に勤め始めていた私は、清家研究室の先輩だった林夫妻の新居を訪ねました。その設計は同時代の建築家、清家清、広瀬謙二、増沢尙らの住宅に通じる水周りを中心としたコアシステムで、方やお二人の寝室、方やご母堂の和室と二人の仕事スペースという構成の家で、今の家に比べ、グレー系の印象だったように覚えています。

台所が食事の場所、家の重心は夫婦より

雅子さんは北海道の紙問屋の長女として生まれたこともあり、呉服屋の長女の私とは、商家の長女という似た境遇で互に通じるものがあつたように思えます。家計を成立させることと人生どうなるかわからないからと、真剣に建築の勉強をしている彼女の姿が印象的でした。何しろ、彼女の切り替えの早さと集中力ははずばぬけていらして、そして自立に対する意思は強靱でした。当時、設計事務所は女性の正式採用はあまりありませんでした。同時代の男性たちが独立しグループで設計事務所を開設する動きがあり、雅子さん達はそんな先達の試行錯誤の情報を得ながら、目白の中原さん宅（私の隣室）で協議を重ね、林・山田・中原設計同人（通称：ハヤナ）のシステムを作り上げていかれました。昌二さんはそんな彼女を理解し、雅子さんは彼と食事をするを原則としていらっしゃり、青山の紀伊国屋で買い物をするお二人を時々お見かけしたものです。ご母堂を見送ることも含め、大変な日々だったことと思います。始めの家は「何を住宅設計のコアとするか」という当時の住宅計画の課題に対する林夫妻らしい提案—台所が食事の場所、家の重心は夫婦より—であり、そんな生活をおおう、家だったように思います。

20年後の増築 - 内部はしっとりした空間 -

当時、清家研究室は魅力的な住宅を解りやすく発表しており、男女の差別もなく、日本女子大の私たち以外



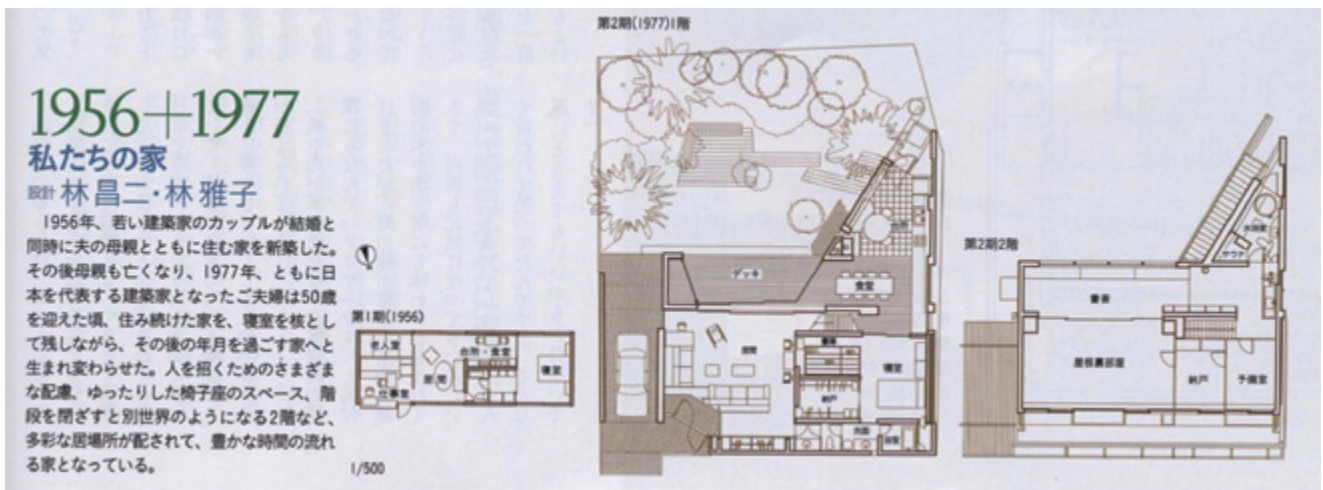
暖炉脇のカウチに座る小川名誉会長。昌二氏はここを自分の座と定めて設計を進めた。(写真：井出)

にも、3回生の三浦さんと4回生の平原さんを受け入れていました。清家先生は気配りの方で、研究室が和やかになるように周りに冗談を飛ばしているその向こうで、雅子さんが清家邸の作図に集中している姿が印象的でした。雅子さんが亡くなった時、清家先生は手塩にかけて育てた愛弟子の死を悼み「さびしいね・・・。」と声を詰まらせていらっしゃるのが忘れられません。

20年後の増築では、あまりの変わり様に驚きました。華やかで、ダイナミックな空間ですが、内部はしっとりした空間という印象です。最初の家のブロック造の上に荷重をかけないように、大きく庇状に屋根をかける構造は、当時彼女の発表してきた海の博物館や草崎クラブの空間技法を反映したもののようにも思え、彼女の円熟味を感じたものです。下階は彼らの日常生活の場であり、上階は、忙しく休暇の取りにくい二人のためのリゾート空間だという説明でした。階段に蓋をし、エルミンサッシで開放された窓前の長テーブルで執筆にふけていたようですね。増築図面をみると、丸っこい字は昌二さんだと思います。雅子さんが「クライアントになりたい」ともおっしゃっていましたから。

終生雅子さんの変わらなかつたことは、「住み手を考える」という姿勢だったと思います。そんな彼女の取り組みの軌跡を見せてくれる家ですね。

(聞き取り 井出幸子、田中厚子)



「CONFORT」2004no.73「高齢社会における家づくりへの視点『内と外に開かれた住宅のすすめ』在塚礼子著」より

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2013年1月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com**岩泉の「だれでもフォトグラフィ」の写真展をVTで！
松川 淳子 MATSUKAWA Junko**

2012年10月20日、21日とヴァージニア工科大学(VT)のニューマンライブラリで開催された本年度のIAWAアドバイザー会議に出席しました。例年通り、モンゴルのサラさん、シカゴのクリスティン・ファロンさんなどが出席するのに加え、今年から、アドバイザーにUIFA JAPONにはおなじみ、デンマークのアリス・フィネラップさんが加わりました。ミルカさんを欠いたアドバイザー会議はやはり少しさびしく感じました。

新しい体制づくりが議論されましたが、前年度に引き続き、委員長にはドナ・デュネイ先生、ニューズレター担当は、ヘレナ・ルナル先生、財務担当は、ケイ・エッジ先生となりました。

私からは、東日本大震災に対する支援や励ましにお礼をいうのと、現在岩泉で展示されている「だれでもフォトグラフィ」の写真展を、VTの中でやらないか、という提案をしました。被災後の写真はあまり世界に流れていませんし、世界の国々からの支援や協力に対してお礼も言えないし、その後の復興の進展などの情報も流したいという意味があることを説明しました。提案は大変喜ばれ、ぜひ、やりたい、写真は何点くらいあるのか、など質問がたくさん出ました。12月1日に岩泉で行われるだれでもフォトグラフィの会合で、これらについて議論し詳細を詰めていきたいと思っています。



デンマークのアリスとモンゴルのサラ



アドバイザー年次総会

**いつも感心するUIFAの復興支援
東京都都市整備局 平野 正秀 HIRANO Masahide**

UIFAの復興支援の斬新さ・細やかさ・生活感覚にいつも感心しています。中越地震後の長岡「法末集落支援」の軸に「お茶会・ガーデニング」を置くアイデアはさすがで私もサポートならぬポータ(荷物持・運転)で今も関わっています。

3・11と「どこでもカフェ」in岩手・福島

東日本大震災以降、岩手県の岩泉町小本仮設住宅で始まったお茶会方式の「どこでもカフェ」には東北全域を見据えたネーミングのすごさがあります。

福島県での「どこでもカフェ」は原発事故で全村避難を強いられている双葉郡(富岡・浪江・双葉町・川内村)住民の住む郡山市と本宮市の仮設住宅で2012年7月からUIFA主催、復興街づくり研と都庁ボランティアネット協賛で2回実施されました。

仮設住宅期から復興期に必要な継続性・専門性そして連携

3.11直後、宮城・福島両県に仮設住宅建設業務で入り地震・津波・原発事故の複合被災の大きさに驚き、同時に支援資金確保と継続的・専門的支援を担う上から復興街づくりNPOの必要性を痛感しました。

福島県双葉郡の「仮の町」や岩手・宮城の高台移転、災害公営建設等の東北街づくり全局面で生活感覚のある継続的支援と専門的知識そして団体間の連携が求められます。

UIFAのアイデア溢れる支援活動に今後とも期待しています。

**役員会報告**

第6回10月25日 9月22日、広報主催でこの指とまれ林白邸見学会報告
第2回郡山どこでもカフェ準備 松川会長IAWAにて総会出席 IAWAにて来年「だれでもフォトグラフィ」の写真展示予定
モンゴル大会への準備 岸本裕子新会員入会 NL92号発刊
第7回11月27日 NL93号企画報告 第2回郡山どこでもカフェ報告 パイオニア展神奈川女性センターにて開催準備 その後越谷市に巡回決定
福島市新地町の住宅相談会支援 第5回岩泉どこでもカフェ開催準備
第8回12月20日 第57回海外交流会「モンゴルの建築・都市最新情報」開催準備 パイオニア展越谷市にて開催打合せ 福島市新地町住宅相談業務会員募集 納会

編集後記

大和路の記紀の名残をたどりつつ、人の心の今も変わらず(須永) 保存に向けての知恵と力を集めることが出来るでしょうか(井出) 関東大震災後の復興小学校117校に、デザインと教育のコラボあり。必見最新本「明石小学校の建築」(中野) ここにも、福島にも、住み継がれない住まいがある(在塚) 櫛の歯が抜けるような仮設住宅の空室に、高所移転の行く末と責任ある展望の難しさを思う(黒石) 光陰矢のごとし。少女老い易く学成り難し(田中) 1号から見れば93号は20年、継続は金。ばちばち。広報委員、皆、志をもち、生きております。復興支援も多様化。こちらも継続が求められる。「原発事故の複合被災」も直視していきたい。今年も厳しい年か。(渡邊)